

医学研究院 教育・研究支援センター10年の歩みと 職員海外研修（アテネオ・デ・マニラ大学）の報告

医学研究院附属ヒト疾患モデル研究センター 教育・研究支援センター 高見 重美

1. はじめに

欧米では共同研究施設は「Core Facility」として広く普及している。単一研究室では設置困難な高額汎用機器、先端高性能機器を共有することの必要性は高まる一方であり、医学研究院ではH18年10月に「教育・研究支援センター」を設立、「Core Facility」として医学研究院に限らず九州大学全ての部局の構成員に対して平等に公開した。この10年の歩みを紹介すると共に、今後の課題についても報告する。

また、今年度アテネオ・デ・マニラ大学で5週間の研修を受ける機会を得ることができたので、その内容を紹介する。

2-1. 支援センター10年の歩みと実績

年々利用者数は増加し、昨年度は、のべ16,000名を超える利用者があった。利用者の半数以上は医学研究院以外の分野であり、本施設が「Core Facility」として有効に活用されていることがわかる。

支援センターの主な業務は ① DNA シーケンス及び DNA マイクロアレイの受託、② 設置機器（約50台）の管理・運営、③ 分子生物学の基礎実験指導、④ 基礎セミナーの開催である。私が担当している主な業務は ②の設置機器の管理・運営であり、習得にある程度時間を要する共焦点顕微鏡、蛍光顕微鏡、高速液体クロマトグラフィー等は、少人数による「実技講習会」を適宜に開いている。この実技講習は「単に機器が使えるだけでなく、理解して使いこなしてもらう」ことを目標に、利用者とはあらかじめ実験内容を確認した後に「3ステップ」で行っている。ステップ1：職員がマニュアルにそって説明 ステップ2：利用者が実際に操作 ステップ3：ステップ2で不安のある利用者には自信がつくまで測定に立ち会うこの丁寧な実技講習には時間がかかるが、研究者の良好な結果につながると共に、機器の人為的な故障を減らすことができている。また、利用者と職員がコミュニケーションを取りやすくなり、有効な機器利用環境を作ることができている。

2-2. 今後の課題

課題は ① 利用者は年々増加傾向にあるが機器設置面積が少ないこと、② 顕微鏡を設置している部屋の空調管理が難しいこと、③ 分子生物学に精通したベテランスタッフの退官などがある。すぐに解決することが難しい問題がばかりであるが、できることから対処を行っていきたいと考えている。

3. 九州大学基金「若手事務・技術職員の能力開発支援」事業による平成27年度職員海外研修報告

- ・ 訪問先：アテネオ・デ・マニラ大学（フィリピン ケソン市）
- ・ 研修期間：平成27年10月5日（月）～平成27年11月6日（金）
- ・ 英語研修：10月5日（月）～10月30日（金）
- ・ インターンシップ：11月2日（月）～11月6日（金）

日本語が通じない環境での研修ということ、英語力が英語検定3級程度以上という条件であったこと、そして何より長期間職場を離れることを快諾してくれた支援センターの職員の理解があり、チャレンジしました。

英語研修の授業は必ずグループディスカッションがあり、その後、意見をまとめて口頭発表または模造紙に書いて黒板にはり解説するという形式であった。慣れるまでは苦手であったが、この授業形態のおかげで否応なく意見とその理由を話さなければならず Speaking と Writing のよい練習になった。最後の1週間は、学生のサポートをしているオフィスでの研修と支援センターと同様の大学内共通施設で勤務する教官4名にインタビューを行い、施設見学をする機会を得た。全般を通して少ない語彙でのコミュニケーションで、伝えきれない、聞き取れないことが多くあったが、たくさんの貴重な経験ができた。今後もこの有意義な研修が継続されることを希望すると共に、一人でも多くの九大職員が参加してほしいと思っている。



Fig.1 「Core Facility」のイメージ



Fig.2 10周年記念パンフレット表紙



Fig.3 英語研修が行われたアテネオ大学内の ALLC (Ateneo Language Learning Center) の建物